九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

英語の二次述語と出来事構造

中野, 康子
九州大学大学院文学研究科 : 博士課程

https://doi.org/10.15017/6788702

出版情報：九大英文学. 41, pp.257-268, 1998-12-15. The Society of English Literature and Linguistics, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

英語の二次述語と出来事構造

中　野　康　子

0．はじめに

本稿では英語の二次的述語の下位類である結果の二次述語と描写の二次述語および結果の二次述語と関連してしばしば論じられる経路表現を取り上げる。これら三者の表現の間には類似点もみられるが、意味的、統語的に異なる部分もある。以下では三者の表現について個々に考察し、それぞれの類似点と相違点を同時に捕らえる分析を提案する。

1．結果の二次述語について

(1)のような例は結果構文と呼ばれる。結果構文においては動詞の目的語名詞句に形容詞等が後続し、この形容詞類が二次的述語として動詞の表す出来事の結果生ずる状態を表す。結果構文内に生起した二次述語を結果の二次述語と呼ぶ。

(1)a. John painted the wall green.
　b. The gardener watered the tulips flat.
　c. Charlie cooked the food black.

結果構文には(1)のようなタイプとは別に、(2)のようなタイプもある。(2)の例では(1)の場合と同様ある行為とその結果生ずる状態が描かれているが、動詞の位置に自動詞が用いられている。従って(2)のタイプの結果構文では、

動詞に後続する名詞句がどの様に認可されているのかという点が問題となる。

(2) a. Fred cooked the stove black.

(Fred cooked {* the stove. / on the stove.})

b. Bill shaved his razor dull.

(Bill shaved {* his razor. / with his razor.})

c. Charlie laughed himself silly/sick/into a stupor.

(Charlie laughed (* himself).)

(3) a. ?The rooster crowed the children awake.

(The rooster crowed (??to/at the children).)

b. ? * In the movie's longest love scene, Troilus and Cressida kiss most audiences squirmy.

(on the desired reading: Troilus and Cressida kiss (* most audiences).)

(Jackendoff 1990 : 227)

(2)の例は、当該の名詞句が結果の二次述語と共起することにより適格文となっている。このため(2)の場合は、目的語位置に生じた名詞句は後続する二次述語によって認可されていると考えることが可能であるが、それではなぜ(3)の例が容認されないのかを説明することができない。(3) においても(2) の場合と同様、結果を表す二次述語は直前の名詞句の指示対象の状態を表しているので、当該の名詞句は結果の二次述語から主題役割を付与されていると考えられる。もし当該名詞句の認可が二次述語からの主題役付与により成立していると仮定すると、(2) と同様(3) も文法的であると予測しなければならなくなる。

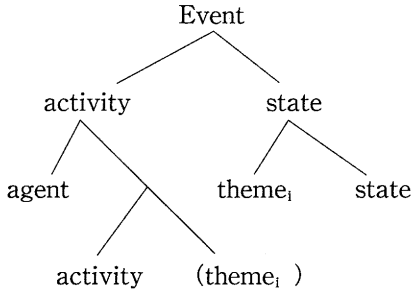
(1) と(2)が容認され(3a,b)が容認されないという事実は、結果構文の目的語名詞句の認可は動詞または二次述語が単独で行うものではなく、動詞と二次述語によって形成される何等かの意味構造によって行われると考える必要

のあることを示している。動詞と結果の二次述語が一つの意味構造を形成するという考えは、(4),(5)が示すように、結果の二次述語が主節動詞によって含意されるような状態を記述するものでなければならず、従って動詞の含意と矛盾する意味を表す述語は結果の二次述語になり得ないことからも支持される。ここでは結果構文は(6)に図示されるような出来事構造(event structure)を意味構造として有していて、問題の名詞句はこの意味構造の中で認可を受けると考える。

(4) a. John painted the roof. → The roof was colored.
　b. Mary blushed. → Mary was red.
(5) a. John painted the roof red/yellow/ * blank.
　b. Mary blushed red/crimson/purple/ * blue/ * white.

(都築 1989：34)

(6)



(6)が表す event は activity と state という二つの subevent の複合体である。これらの subevent は本来単独で一つの出来事構造を構成する要素であり、行為動詞や状態動詞の出来事構造では activity, state がそれぞれ唯一の構成素として指定される。しかし行為動詞が二次的述語を伴って生起する結果構文の場合には、activity と state は個別の出来事構造を構成しているのではなく、同一の出来事構造の構成素として機能する。結果構文で他動詞が用いられる場合、その出来事構造では二つの subevent はそれぞれ theme 項を選択するが、この二つの theme 項は統語的には単一の名詞句として具現しなければならない。もし二つの項が異なる指示対象を表すならば、activity と state は相互の

関連性が失われるためそれぞれ別個の独立した出来事になり、もはや同一の出来事構造の subevent としては機能できなくなるからである。結果構文で自動詞が用いられる場合は、activity においては theme 項は選択されない。しかし state によって theme が選択されるために目的語名詞句が具現し、(2)のような文が文法的となる。但しこの場合 theme 項を選択する state は、activity と共に上位の出来事構造の構成素として機能する要素である。従って state によって選択される theme の位置には、state が activity との間に十分な関連性を持てるような要素が具現する必要がある。(2c), (2b)が示すように、自動詞を用いた結果構文では、目的語位置の要素として主語照応の再帰形代名詞や主語照応の代名詞を含む名詞句が認可されやすい。これは activity が theme 項を選択しない場合、state が activity と関連性を持つためには、state の記述が activity の行為参与者やそれと関連するもの（身体の一部や所有物）に対するものであるのが最も自然であるためである。(2a)のように目的語位置に照応形を含まない普通名詞句が生起することも可能であるが、その場合にも二つの subevent は相互に関連を持つものでなければならない。料理をする際にはそのための道具や設備を用いることが前提とされるため、(2a)の the stove は cooking という activity と関連を持つということが十分可能である。一方鶏が鳴くという行為によって子供が目を覚ますことは可能な出来事ではあるが、そこには前提や含意といった必然的な関連性は見られない。また、人がキスするという行為によって第三者が影響を被ることは自然な出来事ではなく、それは役者のキスシーンという特殊な文脈においてはじめて可能である。(3)の例が容認されないのは用いられている動詞と二次述語の間の意味的な親和性が弱く、両者が一つの出来事構造を形成することが出来ないためであると説明することが出来る。

2．経路を表す句について

結果構文と類似した構文としてしばしば分析される構文の一つに物の移動を表す移動構文がある。移動構文内には移動の経路を表す句が含まれるが、この経路を表す句が結果構文における二次述語と一見同じ文法的振る舞いを

見せる場合がある。例えば(7)においては、通常自動詞として機能する動詞が経路を表す句と共起することにより、目的語を選択している。この例は上に挙げた(2)の例と平行的であるように見える。結果の二次述語と経路を表す句は共に名詞句の認可を動機付ける機能を有していると捕らえることが出来るからである。

(7)a. The general marched the soldiers to the tents.
　　(??The general marched the soldiers.)
　b. The rider jumped the horse over the fence.
　　(??The rider jumped the horse.)

イタリア語の動詞は、非能格であるか非対格であるかによって過去の助動詞として選択する要素が異なるが、(8a)に生じているような非能格動詞であっても、(8b)のように経路を表す句と共起すると、非対格動詞と同じ助動詞を選択することが知られている。このことは、元来外項を唯一的に選択する非能格動詞が、経路を表す句と共起することによって内項をも選択するように変化していることを示している。ここでもやはり経路を表す句は目的語名詞句の生起を可能にする要因になっているということが出来る。

(8)a. Ugo ha corso meglio ieri.
　　Ugo has run better yesterday　'Ugo ran better yesterday.'
　b. Ugo è corso a casa.
　　Ugo is run to home　'Ugo ran home.'

(影山 1996：34-35)

(7), (8)の例によって、結果の二次述語と経路を表す句の間にはある種の平行性があるといえる。またこのような議論と関連して Goldberg(1995)は、結果の二次述語と経路を表す句の間に様々な意味的な類似点のある事を指摘して、この類似点に基づいて結果の二次述語を経路表現の比喩的拡張であるとし、さらに経路を表す句と同様結果の二次述語も goal という主題役割を担う

要素であると分析している[1]。しかし両者の表現を等価であると分析することは妥当でない。もし両者を等価であると仮定すると、上に挙げた(2c)と同様(9)も文法的であるいう誤った予測が成り立ってしまう。

(2)c.Charlie laughed himself silly.
(9) * He ran himself into the station.
(He ran into the station.)

また先程のGoldbergの分析のようにもし結果の二次述語を経路を表す句と同様goal argumentの一種であると仮定すると、すでにgoal roleを含んでいる二重目的語構文においては結果の二次述語が生起しないことが予測されるが、この予測に反して(10)の例は容認される。

(10)She sewed me a new zip on.

(10)は二重目的語にonというparticleが後続している例で、「彼女が私のために新しいジッパーを縫い付けてくれた」というような意味である。このparticleはa new zipという名詞句の結果的な状態を表しているため、結果の二次述語として機能していると考えることが出来る。ここで仮にGoldbergの分析を採用してparticleのonが比喩的なgoalという主題役割を担っていると考えると、受益者を表す直接目的語のmeも同じく比喩的なgoalとして分析されるため、単一の節内に複数のgoalが存在することになり、非文法性が誤って予測されてしまう[2]。(9〜10)の例により、経路を表す句と結果の二次述語の間にはある種の平行性が認められるものの、2つの表現の文法的なステイタスは異なっていると見なすべきであると言う事ができる。

3．描写の二次述語について

二次述語の下位類としては結果の二次述語以外に描写の二次述語がある。描写の二次述語とは例文の(11)に生起しているような形容詞類を指すもので、

動詞が表す出来事が進行している時点での、事物の状態を記述するタイプの二次述語である。

(11) a. John left the room angry.
　　b. I drink coffee black.
(12) a. Charlie ate the hot dogs full.
　　b. * Amy and Beth watched TV into a torpor.

この描写の二次述語は結果の二次述語に比べてよりゆるい制約を受ける。第一に結果の二次述語は動詞の目的語の位置を占める名詞句を記述の対象とすることが義務的であるが、これに対して描写の二次述語は主語を先行詞とすることも可能である[3]。例えば(11a)では主語が、(11b)では目的語がそれぞれ描写の二次述語の先行詞となっている。しかし(12a)では「ホットドッグを食べて満腹になった」という解釈が語用論的に十分自然に成り立つにもかかわらず、結果の二次述語が主語を先行詞にできないため、この様な解釈が許されない。従って(12a)は「満腹の状態でホットドッグを食べた」という描写の解釈しか持ち得ない。また(12b)も(12a)と同様結果構文としての解釈が語用論的には可能であるが、結果の二次述語の目的語指向性の故にそのような解釈が阻止され、非文となる[4]。

結果の二次述語と描写の二次述語の第二の相違点としては、両者に対する意味的な制約の違いが挙げられる。結果の二次述語の先行詞は theme 項であることが義務的であるが、描写の二次述語の場合には(13)に示されているように、agent や goal など、theme 以外にも様々な意味役割を担う名詞句が先行詞になりえる。

(13) a. John returned a hero. (theme)
　　b. John ate the dinner nude. (agent)
　　c. John got the money nervous. (goal)
　　d. John sent the book nervous. (source)

(都築 1989：44)

また結果の二次述語が(4,5)に示したような含意関係を主節動詞との間に有する一方、描写の二次述語にはそのような意味的制約は見られない。(14)は互いに相反する意味を持つ形容詞句のいずれもが、同一の描写の二次述語の位置に生起可能であることを示している。

(14) a. John ate the meat raw/fully cooked.
b. John may visit us drunk/sober.

(ibid : 34)

さらに結果の二次述語がaffectedness verb, unaccusative verbとしか共起しないのに対して、描写の二次述語はあらゆるタイプの動詞と共起可能である[5]。(15), (16)はいずれも描写の解釈を持つ文として容認される。

(15) a. Mary blushed nervous. (unaccusative verb)
b. John sang tired. (unergative verb)
c. John kissed Mary drunk. (transitive verb)
(16) a. John kicked the dog dying. (affectedness verb)
b. They discussed the problem unsolved. (non-affectedness verb)

(ibid : 39)

結果の二次述語と描写の二次述語にはこの様な相違があることから、結果の二次述語は動詞によって随意的に選択された項(argument)であり、描写の二次述語は動詞に対する付加詞(adjunct)とする分析があるが、描写の二次述語を付加詞としたのでは、単一の節の中で描写の二次述語が複数個生ずることができないという事実を説明することができない[6]。(17)に示されているように、描写の二次述語は結果の二次述語とも共起しないのが一般的である。

(17) * I boiled the lobster red alive.

もし結果の二次述語が動詞の項であり、描写の二次述語が付加詞であるなら、

両者が共起できない理由を説明できない。上に述べたように結果の二次述語と異なり描写の二次述語はより緩い制約を受けることから、動詞の形成する出来事構造との結び付きは弱いと考えられるが、単に統語的な付加詞として分析することにも問題がある。

4．3つの表現の相違点について

以上結果の二次述語、経路を表す句、描写の二次述語について見てきたが、これら三者の表現の間には上に述べてきたような相違がみられる。それらの相違は動詞の形成する出来事構造と問題になっている三者の表現の関係の相違に帰することができる。まず既に述べたように、結果の二次述語は動詞と共に出来事構造を形成している、つまり出来事構造の構成素であると考えられる。結果の二次述語が記述する対象は、動詞が表す出来事の結果変化を被る対象であるため、(6)においては結果の二次述語の先行詞は theme role を担う目的語名詞句と同一の指標を与えられている。結果の二次述語の先行詞に対する統語的、意味的制約は、この出来事構造の中で捕らえることが出来る。

一方結果の二次述語と異なり、経路を表す句は動詞の出来事構造内の要素であるとは考えられない。経路を表す句を結果の二次述語と同様に出来事構造の構成素であると分析すると、(9)は文法的、(10)は非文法的であると予測されるからである。しかし経路を表す句が出来事構造の構成素でないとすると(7),(8)の例が問題になるように思われる。これらの例においては経路を表す句の有無が目的語の認可に影響を与えているからである。(7),(8)の場合には、経路を表す句は語彙のレベルで動詞に対して作用し、その結果動詞が他動詞化され、他動詞になった動詞が単独で後続の名詞句を認可していると分析できる。動詞の他動詞化は(18)のような語彙規則を適用することによって引き起こされるものとする。

(18) [X GO path] → [Y CAUSE [X GO path]]

(18)の規則の適用を受けて他動詞に変化した動詞は、単独で出来事構造を形成する。結果構文が生産的な構文であるのは、出来事構造が統語レベルの構造であるためであり、一方(7)のような他動詞化の例が特定の語彙に限られているのは、(18)が語彙規則であり、言語外的知識によるフィルターを通して適用されるためであると考えられる[7]。

描写の二次述語の先行詞に対しては文法機能の点でも、主題役割の点でも厳密な制約が課されないことから、描写の二次述語は出来事構造の構成素であるとは考えられない。にもかかわらず(17)のように単一の節内において二次述語が互いに共起出来ないのは、2つのタイプの二次述語が共にSTATE関数としてthemeという同じ主題役割を単一の名詞句に付与するためであると考えられる。

5．結　び

以上に述べてきたように、結果の二次述語を出来事構造の構成素として、経路を表す句を語彙規則の適用のトリガーとして、描写の二次述語を出来事構造に属さないtheme role付与子としてそれぞれ分析することにより、三者の表現の間に見られる類似点と相違点を捕らえることが出来る。これらの表現をより厳密に文法内に位置づけるためには、本稿で提案した意味構造や語彙規則が他の構造や規則の間にどの様な関係を持つかを吟味することが必要である。

註

1．Goldberg(1995)：3.4.1　参照。

2．Goldbergは結果の二次述語を一種のgoalとして分析し、それゆえ既にgoalを含む二重目的語構文には生起出来ないと述べている。この主張は単一の節内である対象が複数の経路を辿るような叙述がなされてはならないという制約、Unique Path Constraint (Goldberg(1995)：82)を前提としている。(10)におけるmeは典型的なgoalでなくbeneficialであるが、比喩的拡張という概念に基づくGoldbergの分析ではbeneficial

は比喩的 goal として分析されるべきである。従って結果の二次述語を比喩的 goal として分析し、これを Unique Path Constraint の対象であるとする以上は、(10) に生じた beneficial の me も同様に constraint の対象となるべきである。すなわち (10) の文法性を説明するためには、Goldberg は結果の二次述語を goal 項でないとするか、Unique Path Constraint を廃棄する必要がある。

3．描写の二次述語は主語、目的語いずれをも先行詞にできるが、先行詞の定性や指示性等の語用論的要因によって文法性は変化する（岡田1990）。

(i)　a. John met $Bill_i$ $drunk_i$.

　　b. * John met $someone_i$ $drunk_i$.

(ii)　a. John will marry $Joan_i$ $young_i$.

　　b. * John will marry [the girl his parents decided on]$_i$ $young_i$.

(iii)　a. $John_i$ met $Mary_j$ $angry_{i/j}$.

　　b. As for $John_i$, he met $Mary_j$ $angry_{i/*j}$.

(iv)　a. $Drunk_i$, [the man]$_i$ came up to Mary.

　　b. ?$Drunk_i$, $someone_i$ came up to Mary.

4．結果の二次述語の先行詞が動詞の主語である場合、主節動詞は非対格動詞と呼ばれる自動詞のクラスでなければならない。目的語名詞句が先行詞である場合には、affectedness verb と呼ばれる他動詞のクラスのみが主節動詞として生起可能である。換言すれば結果の二次述語の先行詞は theme role を担う名詞句であることが義務的である。

(i) a. The river froze solid. (unaccusative verb)

　b. * John sang tired. (unergative verb)

　c. * John painted the house tired. (transitive verb)

(ii) a. John kicked the dog to death. (affectedness verb)

　b. * They discussed the problem solved. (non-affectedness verb)

5．註 3 参照。

6．都築 (1989) は結果の二次述語を随意的項、描写の二次述語を付加詞であるとし、描写の二次述語を認可するため 2 種類の統語規則を提案している。例えば目的語を先行詞とする描写の二次述語の場合、先行詞は常に theme role をになう名詞句であるという一般化に基づいて、当該の二次述語を theme 項と結び付ける叙述規則を規定している。

(i) Revised Thematic Condition : If X is in V', then X is predicated of the theme of V. (都築1989 : 47)

しかし (i) の規則では次の (ii) の文法性を説明することができない。

(ii) に生起している動詞はいずれも non-affectedness verb のクラスに属する動詞で、

theme 項は選択しないからである。

(ii) a. They discussed the problem unsolved.

b. John examined him naked.

7. (9)で用いられている動詞 run は(19)の語彙規則の適用の対象となるタイプの動詞であるが、(9)の場合は目的語名詞句が主語と同一指示であるため(19)の規則に合致しないと考えられる。

参考文献

Goldberg, A. E. (1992) *Argument Structure Constructions*, doctoral dissertaion, University of California at Berkely.

____. (1995) *Constructions*, The University of Chicago Press, Chicago.

Inada, T. (1995) Lecture handout of the winter term. Kyushu University.

Jackendoff, R. (1990) *Semantic Structures* , The MIT Press.

影山太郎(1996)『動詞意味論』くろしお出版.

Levin, B. and H. Rappaport (1995) *Unaccusativity* , The MIT Press.

中野康子(1995)「使役交替と使役化について」『九大英文学』38号, 145-164.

岡田禎之(1990)「結果の二次的述語の拡張行為について」*Osaka Literary Review* 29, 51-63.

都築雅子(1989)「英語における二次的述語の考察」『英文學研究』, 33-50.